

05・初デートで何を着る？

とある年の秋。十月二十二日、金曜日。十六時半ごろ。

『04・田中さんからお礼電話』から十三日後。

『02・きりゆうななおと、くがすずは』からは、ぴったり二週間後。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は雨。気温は二十四度程度。

天気は晴れ。最近は暖かいし、どうか明日もこのまま晴れであってほしいと、主人公は思っている。

場所は、主人公が通う学校『公立 鵜』から徒歩で行けるところにあるショッピングモール『バアドモール 鵜（くぐい）中央店』のBタウン三階フードコート。

主人公は今、またも涼羽と一緒にジュースを飲みながら一緒に過ごしている。しかし、今日は作業がない。ここへは、完全におしやべりするために来ている。

SE1 フードコートの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【トラック02と同じSEだが、開始位置を変えている】

【0—5秒ほど流して『涼羽』のセリフ】

〈涼羽〉

「【どきどき、にまにまと嬉しそうに。】

自分から七緒の話題を切り出す。

涼羽にとって今最も楽しい事は、主人公と七緒の恋愛模様を応援する事なので。

涼羽はトラック02から二週間を経て、七緒とすっかり仲良くなっている。

具体的には、呼び方が『桐生さん』から『なーちゃん』に変わっている」

「いよいよ明日ですねえ。なーちゃんと遊園地デート」

〈主人公〉

「……おう」

緊張した面持ちで頷く主人公に、涼羽がにまにまと微笑む。

この後輩と来たら、主人公が明日人生初デートを迎える事が、とにかく面白くてたまら

ないらしい。

〈涼羽〉

「『心配しているのか？ それともからかっているのか？』といった口調でたずねる。
だんだん七緒に似てきている」

ちゃんと酔い止め買いました？

長距離バスってあんま揺れないですから大丈夫だとは思いますが。

【『エスコート』を強調して】

先輩はなーちゃんをエスコートする立場なんですから。気合十分でお願いしますね。

【さらに、真面目なトーンでからかう。主人公がいつも、ちゃんとティツシュとハンカチ
を持っている事を知っていて言っている】

あ。ティツシュはちゃんと補充して、ハンカチは二枚位持つときましようね」

〈主人公〉

「酔い止めはちゃんと買ったし、ティツシュとハンカチも準備済みだわい！

……ていうか、すうさあ。

いつの間に桐生を『なーちゃん』なんて呼ぶ関係になってるんだよ」

〈涼羽〉

「『しれっと。『私となーちゃん』は、お互いに好意を持っているもの同士ですもの。これ位進展してもおかしくないでしょう?』とでも言う感じで」

ええ? そりゃあ、この半月位で、すっかり仲良くなったからですよ。

【『桐生』をぼそっとした、つつけんどんな言い方で言う。

具体的には『好きな子を意識しすぎて、ついぶっきらぼうな態度を取ってしまう男子が、好きな子と呼ぶ時』のようなイメージで」

※この先三つ『芝居がかった呼び方』が続きます。

なので、ナチュラル目に、わざとらしくなりすぎないように、くどく感じられないようにお願いします。

先輩こそ、いつまで『桐生』なんて呼び方してるんですか?

【『なーちゃん♥』を甘々な言い方で言う。

具体的には、『同性の友人と恋人ごっこする位仲のいい少女が、その友人を呼ぶ時』のようなイメージで」

私や田中さんみたいに『なーちゃん♥』とか。

【『七緒っ』を低めの芝居がかった口調で、わざとらしく言う。

具体的には『乙女ゲームのキザなイケメンキャラクターが、主人公を呼ぶ時』のようなイメージで」

はたまた恋人らしく『七緒っ』って呼んであげて下さいよ」

〈主人公〉

「ここに、恋人じゃねーし！ お友達だし！」

〈涼羽〉

「軽く受け流して。」

主人公のこの手の言い訳は、もはや毎日のように聞かされていて、耳にタコなので、
はいはい。もう付き合ってるみたいなものだと思いますけどね。
で？ 最近なーちゃんとはどうなんですか？」

〈主人公〉

「いやいや、すう、あなたね。知ってて聞くのはやめなさいよ」

〈涼羽〉

「しれっと。それは、七緒に似てきたのもあるし、七緒の件を通じて主人公とますます親しくなり、さらに遠慮がなくなってきたのもあるのですね」
まあ知ってますけどね。

「この約二週間の主人公の過ごし方を、あえて言語化して言い聞かせるように話す。

『こんなの、客観的に見てラブラブすぎます』という事を、主人公に理解してもらいたい。

また、本当に主人公と七緒がラブラブなので、涼羽は主人公と過ごす時間が以前より減ってしまっている。

なので、少しでも嫉妬してしまったり、淋しく思ったりする気持ちもある」

毎日学校終わったら、なーちゃんお店まで送って行って。

バイト終わる時間になったら、帰宅確認がてら連絡して。

【『メッセ』は『メッセーシアプリ』の略】

そのまま寝る時間までメッセでやりとり。

【『くるみ堂』とは、学校の近くにあるローカルチェーンパン店の事。

くるみ堂は単価が安い上に非常にクオリティが高く『市民の味方』と言われる存在である。

おまけに、鵜中央店はイートインスペースが広くて大きい。

学生達からも人気のスポットである」

週一のお休みの日は、『くるみ堂』でパン食べながらずーっとおしゃべりでしょ？

控えめに言ってもラブラブすぎ」

〈主人公〉

「ラブラブ、かなあ……？」

〈涼羽〉

「『そうだぞ。自覚しろ』という感じで」

ええ。私自身、こんなにうまく行くとは思ってなかった位です。

「二人が知り合った当初の事を思い出しながら。」

当初涼羽は、二人に共通の話題を作るために、七緒に沢山漫画を貸したり、主人公の好きな作品について勉強させたりしたので」

最初は色々心配でしたから。

「この約二週間の主人公の変化を、あえて言語化して話す。」

『主人公は当初、七緒に自作のイラストを見せる事を渋っていた。しかし、今では普通に見せているし、なんなら七緒の好きなキャラクターのイラストまで描いてあげている』
と言いたい」

でも今じゃ、先輩、絵まで普通に見せちゃってるし。

なんなら、なーちゃんの推しまで描いてあげちゃってるし。

「しみじみと。やっぱりちよつと嫉妬しているが、ごく軽度である。」

なぜなら、主人公は、部活がある日は七緒を送った後律義に部室まで戻ってくるし、そ

うでない日も、涼羽と合流して遊ぶ日もある。

なので主人公が、最大限自分や部員たちを大切にしてくれている事をわかっている。
だから『嫉妬してますアピール』はしない事にする」
仲良くて羨ましい限りですよ」

〈主人公〉

「そ、そ、そ。そうかなあ……♡」

主人公、涼羽の言葉が嬉しくて、もはや恥じらうのも忘れてデヘデヘし始める。
そう。この十三日間で、主人公と七緒は飛躍的に親しくなった。
具体的には、おおむね涼羽が今まとめてくれた通りだ。

だがその他にも、朝なんとなく時間を合わせて一緒に登校したり、休み時間も何かと理由を付けてお互い会いに行ったり。さらに休みの日も主人公は買い物のふりをして無駄にバアドモールに顔を出して、働く七緒に手を振ったりなどしている。
とにかく、誇張抜きに、二人は今、本当にラブラブなのである。

〈主人公〉

「あ、そうそう。あのスマホケースって実はオタグッズだったんだもんな。

桐生に教えてもらった時はびっくりしたよ」

〈涼羽〉

「【同意して】

そうそう。

「『その件については、私も驚きました』という感じで。

七緒から打ち明けられるまで、本当に気づかなかったの。

『オタグッズ』は『オタクグッズ』の略」

あのスマホケース、実はオタグッズなんですもんね。

「『プリプロ』とは『プリマ・プロローグ！』という、美少女たっぷり系ソーシャルゲームの略称。

涼羽は『七緒のスマホケースは、実はプリプロのキャラクターグッズだった。しかし主人公も涼羽もプリプロは未プレイだったので、二人揃って気づかなかった』と言いたい」
私も先輩も『プリプロ』は未履修でしたもんね。

「『自分はイラストレーターとして活動しているのだから、できるだけ流行の作品や流行の絵柄は押さえておきたい』という意味で言っている」

絵を描くなら、流行ジャンルはできるだけ押さえとかなきゃって思ってるんですけど。

「『みかど』も『明日菜』も『プリマ・プロローグ！』のキャラクター」

プリプロはみかどちゃんと明日菜（あすな）ちゃんしか知らなかったです」

〈主人公〉

「みかどちゃんも明日菜ちゃんも、メイド衣装で死ぬほどバズった子達だもんね。夏頃とか、毎日っていうか数時間おきに二人の絵見たわ」

〈涼羽〉

「【同意して。】

『当時SNSでみかどと明日菜のイラストを投稿するのが大流行し、自分達も二人のイラストを浴びるほど見た』と言いたい」

ねー。夏頃、めっちゃバズりましたもんね。

【少し間をあけてから。】

『セーラちゃん』とは『プリプロ』における七緒のお気に入りキャラクター『鏡（かがみ） セーラ』の事』

もし代わりにバズってたのが、なーちゃんの推しのセーラちゃんだったら。

私達、スマホ拾った時すぐ『オタ仲間だ』って気づいてたかもしれないね。

【多少強引に話を戻す。話がそれていた事に気づいたので。】

『とと』は『おとと』の略』

とと。とにかく、なーちゃんがゆるオタだって事もわかりましたし。私、お二人はうまく行くと踏んでいます。

『ハピエン』とは『ハッピーエンド』の略】

後は先輩がどーんに行っちゃえば！ ハピエン間違いなしです♥」

〈主人公〉

「……あの、すう」

主人公、ここで、ドキドキと切り出す。

それは今日、涼羽に来てもらっている理由についてだ。

とは言っても、相手は『今、主人公と一番親しい友人』と言っている涼羽である。ただ主人公の手は、すっかり緊張しきって冷え冷えだ。

つまりその位、主人公にとっては重要な話題なのだ。

〈涼羽〉

「『きょんとん』として。主人公がこれから何を言おうとしているのか、見当もつかないのでん？」

〈主人公〉

「実は、その件なんだけど……。

わたし、その。遊園地で。ちよつと頑張ろうと思つてて……」

〈涼羽〉

「【驚いて。主人公が最後まで言わなくても、おおかた内容を察したので】
えっ！」

主人公が頷くと、涼羽が両手で口許を覆つて驚く。

小動物のように目をぱちぱちさせて、主人公の次の言葉を待っている。

〈涼羽〉

「【少し間をあけてから。とてもドキドキして。

『遊園地デートの日に告白するつもりなのか？』と聞きたい】

じゃあ、遊園地で……!!」

〈主人公〉

「……うん。言おうと、思つてる。」

『わたしも桐生が好きだ』って。『お付き合いしてほしい』って、言う、つもり」

〈涼羽〉

「大はしやぎして。『ぜひそうするのがいい』と思っているので」
わー！　ほんとですかあ！

「ドキドキと尋ねる。」

『具体的には、どのようなタイミングで伝えるつもりなのでしょうか』と聞きたい。
ノープランでは困るので」
ど、どんな感じで？」

〈主人公〉

「……観覧車とか、いいなあと思って……」

〈涼羽〉

「大はしやぎして。『ぜひそうするのがいい』と思っているので」
観覧車……！！」

〈主人公〉

「べ、ベタすぎるかなあ……？」

〈涼羽〉

「【大はしゃぎして。『ぜひそうするのがいい』と思っているので】
とんでもないです！ 観覧車で告白！ すごくいいですよ！」

言い終えると、涼羽の目がきらきらと輝く。

それを見て、主人公はホツとした。

もしこの件について誰かに打ち明けるなら、最初の人 は涼羽がいい。
そう思っていたからだ。

という事で主人公は、たった今申し上げた通り、七緒への告白予定日を明日・十月二十三日に定めた。

ロケーションとしては夕方頃、場所は観覧車を想定している。

我ながらベタもいい所だが、観覧車という場所は、実際告白に適していると思う。

観覧車はレジャースポットの真ただ中でありながら、一定時間確実に二人きりになる事ができる。その上、美しい景色も見られるという、実に優秀なアトラクションだからだ。

逆に言えば、断られたらその後が地獄のスポットでもあるが……今それを考えるのはよ

そう。

とにかく、主人公は明日、次のような作戦を実行するつもりだ。

まずは昼間、可能な限り七緒とのデートを盛り上げ、同時に、可能な限り好感度を下げないように立ち回る。

これによって七緒に『先輩と一緒にいると楽しいなあ。遊んでいる最中もさりげなく色々親切にしてくれるし、恋人としても素敵かも』と思ってもらう。

要するに、七緒に少しでも好意を持ってもらう努力をするのだ。

次に『ちょっとロマンチックな空気になってきましたね。どこかでゆっくりしましょうか』というタイミングで『じゃあ、観覧車なんてどう？』と、さりげなく二人きりになれる場所へ誘う。

そして遊園地を一望しながら、これまで一人に起きた事や今日のデートの感想など、様々な出来事を振り返って……二人のときめきが最高潮に達したタイミングで、ストレートに『好きです』と伝えるのだ。

やはりベタ中のベタだ。だが、主人公は『恋愛初心者の自分が下手にオリジナリティを出したところで、事故率が上がるだけだ』と考えている。

よって手堅く、しかし、どの点においても絶対に手を抜かずに行く事にしたのである。

……まあこの、『告白前、桐生に少しでも好意を持ってもらう努力』ってのがまず大変な

んだけどな。

『デートを盛り上げる』ってところからまず『我ながら簡単に言ってくれるなあ』って感じだし。『できるだけ好感度を下げないように頑張る』ってのも気が抜けない。

そう……具体的には、服装だ。

わたし……その辺……ちよつといまいちだもんなあ……。

そうなのである。

これまであまり見た目に頓着してこなかった主人公は、この分野が実に弱い。

自分なりにはこだわって生きてきたつもりだが、初心者にありがちな『いいなと思うアイテムを、組み合わせ度外視で買う。その結果、有効活用できないアイテムが多数存在』『結果、いつも同じ、あるいは妙なコーデが完成』というやつなのだ。

これまでは基本的に制服で会っていたから、まだなんとかなっていた。

しかし『デート着を用意しろ』と言われると、途端に不安になる。

おまけに数少ない比較的マシな服およびコーデは、あろうことか、休日にバアドモールに行く時にすでに着て行ってしまった。

要するに、デートに着ていく服がないのである。

〈涼羽〉

「【合点がいく。先ほど『今日は洋服を見に行きたいので、付き合ってほしい』と言われた理由がわかったので】

あ、だから今日『後で服見に行こう』っておっしゃってたんですね！」

しかし、そんな主人公の思惑も、涼羽にはお見通しのようだ。
それどころか、なんだかずいぶんノリノリである。

〈主人公〉

「……まあ、そういう事。付き合ってくれるよな？」

主人公がもじもじすると、涼羽が両手を上げて笑う。

持つべきものは友達である。涼羽もあまりファッションに関心がある方ではないが、主人公に対する遠慮もない。

主人公の謎センスに、忖度なくつつこみを入れてくれるはずだ。

〈涼羽〉

「【ものすごく上機嫌で】

もちろんですよお！」

「とても張り切って、これから探しに行く服の方向性を提案する。

涼羽は『それでは、七緒に好まれそうな服を探すのどうか。具体的には、セーラのフアッシヨンに寄せたコーデイナートなら、確実に七緒に喜ばれるのではないか。それなら、特別おしやれではない自分も貢献できそうだし。ただし、主人公が普段着ている服の系統とは多少異なるが……』と言いたい」

じゃあなーちゃんウケするように、セーラちゃん風の服探します？

まあ、先輩とはちよつと服の系統違いますけど。

【『なーちゃんもきつと喜ぶ』と言おうとするが、途切れる】

意識して寄せたって事がわかれば、きつとなーちゃんも……」

〈主人公〉

「……あっ！」

しかしここで主人公は、一つ重要な事を伝え忘れていた事を思い出す。
なので慌てて、己の意思を伝える。

〈主人公〉

「ありがとな、すう。そんなに色々考えてくれて、ほんと嬉しいよ。

確かに、それもすごくいいなっと思う」

〈涼羽〉

「【きょんとんとして。主人公には、別の案があるようなので】
ん？」

『七緒の推しキャラのファッションを参考にして、コーディネートを考える』
涼羽のこの提案は、確かに手堅く、有効な作戦だと思う。

たとえばデートを一度きりと考えているなら、主人公は賛同していたと思う。
でも、そうではない。今後七緒と末永く付き合っていきたいからこそ、主人公は、服装の面においては、オリジナリティというか、自分らしさを出す必要があったのだ。

それは、自分がどういう人間なのかを、もっと、かつ正しく七緒に知ってもらいたいからだ。

たとえばあまりおしやれとは言い難いコーディネートが仕上がったとしても『これが、今の染谷あんずの全力なのです』と、七緒に知ってもらわなければならないからだ。

〈主人公〉

「けど。明日は……『誰々風』とかじゃなくて。」

自分で選んだ、一番いい服で行きたいなって。
だから……協力してくれるか？」

〈涼羽〉

「【息づかいだけで表現する。とても感激して。

これまでファッションにあまり興味のなかった主人公が、自分なりに頑張ろうとしているのが伝わってきたので」

……！」

そんな主人公の気持ちは、どうやら涼羽にも伝わったようだ。

涼羽は大きく、何度も頷くと、テーブルの上でもごもごしている主人公の両手を、上からそっと握りしめる。

それから早速、こう言ってくれた。

〈涼羽〉

「【嬉しそうに同意する。

主人公がそれだけ七緒の事を真剣に考えているとわかったので」
私も。それがいいと思います。」

「少し間をあけてから。

改めて気合を入れる感じで」

よし。じゃあ。先輩が一番いいと思う服。探しに行きましょう！」

ここでフェードアウトして終了。